

英語史の研究

寺 澤 盾

英語史・英語学に関する情報満載の David Crystal, *The Cambridge Encyclopedia of the English Language* (Cambridge University Press, 1995) は 2003 年に第 2 版が出ているが、15 年ぶりに新版 (2018) が上梓された。第 3 版は第 2 版よりも 70 ページほど増量されており、フェイスブックやツイッターなどに見られる新たな英語変種 (new online varieties) への言及もある。また、世界語としての英語に関する統計的な数値もアップデートされている。L1 (母語としての英語) の話者数は第 2 版では 329,058,300 人であったが、第 3 版ではおおよそ 6 千万人増加し 388,219,600 人となっている。一方、L2 (第 2 言語としての英語) の話者は前版では 422,682,300 人であったのが新版では 4 億 7 千万人の増加で 896,546,800 人となり、L1 の話者数との差がさらに広がっている。第 3 版では英語を外国語として話す人を 1,033,133,700 人と見積もっている。世界の英語話者数は 20 億を優に超えることになる。本書は今後も英語史・英語学を学び研究する者にとって必須のレファレンスとなるであろう。

以下では、2018 年 1 月～12 月に刊行された英語史関連の文献をできるかぎり広く紹介していきたい。文献情報収集にあたっては三浦あゆみ氏のウェブページ A Gateway to Studying HEL (「2018 年刊行文献」) を参照させていただいた。

I. 通 史

『英語年鑑 2018』でも指摘したが、近年、英語史と英語教育をつなぐ研究が増えてきている。片見彰夫・川端朋広・山本史歩子共編『英語教師のための英語史』(開拓社)はおもに英語教員向けに書かれた英語史入門書である。古英語から現代英語まで時代順に英語の歴史をたどっていくという従来の英語史本の構成であるが、各時期の英語を概観したうえで、それぞれの時期に書かれた代表的な文学作品(たとえば古英語については『ベオウルフ』)の一部を読ませるという新機軸も見られる。

このほか日本で出版された英語史関連の書物としては、服部義弘・児馬修共編著『歴史言語学』(朝倉書店)がある。これは朝倉日英対照言語学シリーズ発展編の第 3 巻である。対照言語研究というと一般には共時的なものを連想するが、日本語と英語の言語変化を対照することによって一方の言語史だけを見ていたのでは気付かなかった新たな発見があるかもしれない。2018 年度は既刊の英語史概説書 2 冊の改訂版も刊行されている。児馬修『ファンダメンタル英語史——改訂版』(ひつじ書房)は旧版に添えられていた「練習問題」に大幅に手を入れており、岸田緑溪・早坂信・奥村直史『英

語の謎——歴史でわかるコトバの疑問』(KADOKAWA)は『歴史から読み解く英語の謎』(教育出版, 2002)の改題文庫版である。

国外で刊行された英語史本としては、まず Steve Kleinedler, *Is English Changing?* (Routledge) にふれたい。著者は *American Heritage Dictionary* の編集主幹であり、おもに学部学生を対象に英語の歴史をわかりやすく解説すると同時に、言語変化にまつわるさまざまな誤解を解いていく。William A. Kretschmar, Jr., *The Emergence and Development of English: An Introduction* (Cambridge University Press) も学部生向けに書かれた英語史入門書であるが、各章ごとにまとめや練習問題や文献リストが添えられており reader-friendly である。タイトルにある emergence (創発) は複雑系理論で用いられる用語で、著者は言語変化を個人間のランダムな言語コミュニケーションが一定の言語パターン・規則性を形成していくプロセスと捉えている。Stephan Gramley による英語史概論 (*The History of English: An Introduction* [Routledge]) の第2版が出版されたことも付言しておく。

英語語源・語彙史に関連する本として、White Kennett (ed. Javier Ruano-García), *Etymological Collections of English Words and Provincial Expressions* (Oxford University Press) と Peter Petré, Hubert Cuyckens and Frauke D'hoedt, eds. *Sociocultural Dimensions of Lexis and Text in the History of English* (John Benjamins) を紹介しよう。*Etymological Collections* は、1690年代に White Kennett (1660-1728) がイギリス諸方言から収集した語に語源的解説を加えた *Etymologicon Anglicanum* (British Library, MS Lansdowne 1033) に詳細な序論を添えて初めて刊行したものである。Kennettの語源記述は Joseph Wright の *The English Dialect Dictionary* や *OED* にも影響を与えている。*Sociocultural Dimensions* は、英語語彙の変化をジャンルや社会・文化と結びつけて考察した論文集で、日本人研究者による寄稿もある: Minako Nakayasu, “Spatio-temporal Systems in Chaucer”, Ryuichi Hotta, “*Betwixt, amongst, and amidst*: The Diachronic Development of Function Words with Final /st/”. 国内では石井米雄『英語の語源』(KADOKAWA)が管見に入ったが、これは『語源の楽しみ』(めこん, 2011)を改題したものである。

英語辞書史に関連する出版物として Lindsay Rose Russell, *Women and Dictionary-Making: Gender, Genre and English Language Lexicography* (Cambridge University Press) に注目したい。従来の辞書史では女性が果たしてきた役割について論じられることはほとんどなかったが、Russellは15世紀から現在まで女性が編纂者、批評家、パトロンなどとしてさまざまな形で辞書作りに貢献してきたことを明らかにしている。

文法・統語の分野では以下の3点が刊行された: Andrea Moro (trans. Bonnie McClellan-Broussard), *The Brief History of the Verb To Be* (MIT Press); Hubert Cuyckens, Hendrik De Smet, Liesbet Heyvaert and Charlotte Maekelberghe, eds.

Explorations in English Historical Syntax (John Benjamins); Alex Ho-Cheong Leung and Wim van der Wurff, eds. *The Noun Phrase in English: Past and Present* (John Benjamins). Moro はイタリアの L'Istituto Universitario di Studi Superiori di Pavia の一般言語学教授であるが、言語学を始めとする諸分野における be 動詞解釈の歴史を アリストテレスから現在までたどっている (原文はイタリア語で上記の書籍はその英訳)。 *Explorations in English Historical Syntax* は論文集で家入葉子氏 (“Causative *make* and Its Infinitival Complements in Early Modern English”), 海田皓介氏 (“A Study of Old English *dugan*: Its Potential for Auxiliation”), 柴崎礼士郎氏 (“Sequentiality and the Emergence of New Constructions: *That's the bottom line is (that)* in American English”) による論文も収録されている。 *The Noun Phrase in English* は英語の名詞句を共時的・通時的に考察した論文集で、Christine Günther, “The rich, the poor, the obvious: Arguing for an Ellipsis Analysis of ‘Adjectives Used as Nouns’”, Annette Mantlik and Hans-Jörg Schmid “*That*-complementiser Omission in N + BE + *that*-clauses: Register Variation or Constructional Change?” など興味深い論考が並ぶ。

アリゾナ州立大学教授 Elly van Gelderen は北米において最もプロダクティブな英語史研究者の一人であるが、2018 年度は動詞の意味に関する研究書を上梓した (*The Diachrony of Verb Meaning: Aspect and Argument Structure* [Routledge])。知覚動詞、心理動詞などにおける史的意味変化を言語習得の問題とも結びつけて議論している点が刺激的である。

英米語に関しては Lynne Murphy による *The Prodigal Tongue: The Love-Hate Relationship between British and American English* (Oneworld Publications) が目に止まった。Murphy はイギリスで活躍するアメリカ人英語学者であるが、イギリス英語とアメリカ英語に関するさまざまな偏見・誤解を軽いタッチでユーモアを交えて明らかにしていく。

英語の標準化をテーマにした論文集も出ている。Linda Pillière, Wilfrid Andrieu, Valérie Kerfelec and Diana Lewis, eds. *Standardising English: Norms and Margins in the History of the English Language* (Cambridge University Press) には、Lynda Mugglestone, “The End of Toleration? Language on the Margins in Samuel Johnson’s *Dictionary of the English Language*”, Charlotte Brewer, “Setting a Standard: Authors and Sources in the *OED*”, Ingrid Tiekens-Boon van Ostade, “The Grammatical Margins of Class” など標準化の問題を論ずる際、今後必読となると思われる論文も含まれている。

最後に、三輪伸春氏による『新たな英語史研究をめざして——詩学と記号論を視点に』(開拓社)にもふれたい。同書には民間語源、英語人称代名詞の変遷、シェイクス

ピアの言語などに関する論考が収められている。

II. 時代別

《OE》古英語に関する研究としては Lotte Sommerer, *Article Emergence in Old English: A Constructionalist Perspective* (Walter de Gruyter) が挙げられる。これは英語においてどのように不定・定冠詞という文法カテゴリーが成立していったのかを古英語散文をコーパスにして考察したものである。小倉美知子氏は中世英語についてすでに多くの単著(英語)を上梓しているが、新たな業績として *Periphrases in Medieval English* (Peter Lang) が加わった。同書は助動詞などを用いた迂言表現の発達を古英語から中英語まで詳細なデータに基づき実証的にたどったものである。

《ME》中英語に関してはまず日本人研究者による業績にふれたい。中尾佳行『チョーサーの言語と認知——「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元的構造』(溪水社)は『カンタベリー物語』の中でチョーサー自身が語る「トパス卿の話」を取り上げ、テキストの重層的意味がどのように生じてくるのかを解き明かす。

『英語年鑑 2017』において日本の研究グループによる初期中英語の宗教作品群 (*Ancrene Wisse*, Katherine Group, Wooing Group) の diplomatic parallel texts の 3 部作が完成したことをお伝えしたが、Harumi Tanabe, Koichi Kano and John Scahill, eds. *Linguistic Variation in the Ancrene Wisse, Katherine Group and Wooing Group: Essays Celebrating the Completion of the Parallel Text Edition* (Peter Lang) はその完成を記念した論文集であり、パラレル・テキストを用いた研究成果が披露されている。

国外からの業績としては Marta Sylwanowicz, *Middle English Names of Medical Preparations: Towards a Standard Medical Terminology* (Peter Lang) が挙げられる。これは著者が収集した 1600 項目を超える中英語期の薬剤名称を言語学的に分析したものである。

《ModE》まずは初期近代英語から見ていきたい。ロンドンの Wellcome Library には Elizabeth Jacob という人物の署名の入った治療本が収められているが、Miriam Criado-Peña による *The Early Modern English Version of Elizabeth Jacob's Physicall and Chyrurgical Receipts* (Cambridge Scholars Publishing) はその医療書を初めて編纂・刊行したものである(書物の前半にはその治療本が収められている写本および言語に関する詳細な解説が付されている)。編纂されたテキストを見ると、たとえば風邪をひいたとき当時の人々が治療のためにどのようなものを飲食していたのかがわかり興味深い。

ここ数年、後期近代英語に関する研究が急速に盛んになっているが、2018 年度も研究書が 7 冊上梓された。特筆すべきことは、そのなかの 3 点が日本人研究者によるものであることである: Ken Nakagawa, *Wordsworth's Vocabulary in The Prelude*

(Keisuisha); Kazuho Murata, *The Structure of Defoe's Phrasal Verbs: An Exploration into Defoe's Language of Fiction* (Keisuisha); Masami Nakayama, *Grammatical Variation of Pronouns in Nineteenth-Century English Novels* (Hituzi Syobo). 中川憲氏はワーズワスの自伝的な長詩の語彙がどのようなネットワークを形成しているのかを詳細に考察している。村田和穂氏はダニエル・デフォーの小説の言語を「句動詞」に焦点を当て分析し、句動詞の用法が *Robinson Crusoe* などに見られる鮮烈でリアルな描写の鍵を握っていることを示している。中山匡美氏は19世紀のイギリス小説における代名詞の変異形に注目し、異なる形態が社会言語学、語用論などに関わるさまざまな要因によってどのように使い分けられていたのかを明らかにしている。さらに当時の規範文法から小説の言語への影響についても考察している。日本人研究者によるこれらの著作はいずれも英語で執筆されており今後海外でも広く読まれることが期待される。

国外でも後期近代英語関連の業績が目立つ。Joe Bray, *The Language of Jane Austen: Language, Style and Literature* (Palgrave) はオースティンの小説で異なる視点、異なる文体が複雑に相互作用していることを明らかにしている。David West Brown, *English and Empire: Literary History, Dialect, and the Digital Archive* (Cambridge University Press) は、18世紀半ばから19世紀初めにかけて大英帝国が海外で植民地支配を拡大していく中で、アフリカやアジアの植民地における人々の声がイギリス小説の中に取り込まれていく様子を明らかにしている。

18世紀といえば、Robert Lowth を始めとする規範文法家が影響力を持った時代であるが、Terttu Nevalainen, Minna Palander-Collin and Tanja Säily 共編の論文集 (*Patterns of Change in 18th-Century English: A Sociolinguistic Approach* [John Benjamins]) は規範主義が18世紀の英語で進行していた言語変化(たとえば助動詞 *do* の発達など)にどの程度影響を与えていたのかを検証している。所収の論文には Minna Nevala, “‘Ungenteel’ and ‘Rude’? On the Use of *thou* in the Eighteenth Century”, Arja Nurmi, “Periphrastic *do* in Eighteenth-century Correspondence: Emphasis on No Social Variation”, Minna Palander-Collin, “Ongoing Change: The Diffusion of the Third-person Neuter Possessive *its*” など興味深いものが並ぶ。

英語におけるスペイン語借用語は近代以降増えているが、Julia Schultz, *The Influence of Spanish on the English Language since 1801: A Lexical Investigation* (Cambridge Scholars Publishing) は19世紀以降のスペイン語借用語 (*OED online* から収集した1355語)について年代による借用数の差異、借用以降の意味変化などについて詳細に調査している。

III. 論文集(すでにふれた論文集については割愛)

記念論文集としては、地村彰之氏(広島大学名誉教授)の退職記念論文集(Hideshi Ohno, Kazuho Mizuno, and Osamu Imahayashi, eds. *The Pleasure of English Language and Literature: A Festschrift for Akiyuki Jimura*, Keisuisha)が刊行され、古英語から現代英語までの語学文学に関する論考 26編が国内外から寄せられている。海外に目を向けると William Marx 氏に献呈した論文集(Margaret Connolly and Raluca Radulescu, eds. *Editing and Interpretation of Middle English Texts: Essays in Honour of William Marx*, Brepols Publishers)が出ている。Marx 氏は 40 年近くウェールズ大学で教え中英語期の写本研究やテキスト編纂に関して多くの業績がある。論文集には日本人研究者からの寄稿(Mayumi Taguchi, “The Use of Sources in the *History of the Patriarchs and Caxton’s Golden Legend*”)を含む 15 本の論考が収められている。

学会発表論文をまとめたものとしては、Michiko Ogura and Hans Sauer, eds. *Aspects of Medieval English Language and Literature: Proceedings of the Fifth International Conference of the Society of Historical English Language and Linguistics* (Peter Lang) が挙げられる。これは 2017 年に英国リーズで行われた International Medieval Congress の 6 つのセッションで発表された中世英語英文学関係の 16 本の論文を所収したものである。このほか英語史に関連する論文集としては、Masahiro Hori, Yuko Ikeda, and Keisuke Koguchi, eds. *A Chronological and Comparative Study of Body Language in English and American Literature* (Kaitakusha) がある。同書は英語史的文体研究に関する論文集で、身体表現に焦点を当て古英語から現代英語までの文学作品における顔・目(視線)・手・動作などの描写を考察したものである。

IV. 学術誌掲載論文

2018 年に国内の学術誌に掲載された英語史関連の論文を以下、学術誌別にリストアップしておく。昨年同様、国内紀要に発表された論文に関しては残念ながらスペースの都合上割愛せざるを得なかったが、『英語年鑑』の「個人研究業績一覧」を参照されたい。

〈*Studies in Medieval English Language and Literature* No. 33〉Akiyuki Jimura, “Chaucer’s House Revisited”, Yasuyo Moriya, “The Line-Initial *And* in Middle English Alliterative Verse: Narrative Speech Mode in Literary Poems”; 〈『英文学研究支部統合号第 11 巻』(『関東英文学研究』第 11 号 2019)〉浜名恵美「デジタル・ヒューマニティーズの本格的導入の提案——日本の英語文学研究の resilience のために」、小川浩「Ælfric の複合関係代名詞——*Nativitas Domini* における用法についての追記」; 〈『日本英文学会第 90 回大会 Proceedings; 付 2017 年度支部大会 Proceedings』〉西野友一郎, “Deleted King(s) in Warwick Manuscript of *Cælica*: Greville as a

Counsellor to King James I”, 大島範子「悪魔の改造か，神意に基づく改革か——Andrew Marvell の 1652 年までの詩作品におけるチューリップ」，菊池清明「14 世紀における自然描写の変容——『ガウエイン卿と緑の騎士』と『カンタベリー物語』」，小倉美知子「詩篇行間注釈書にみるキリスト教語彙の古英語訳」，豊田昌倫「統一性から多様性へ——現代英語期の聖書における表現と文体」，内田脩平「英語の関係節における二重詰め Comp フィルターの通時的発達について」，中川聡「古英語・中英語の独立分詞構文の通時的発達について」，岩國智子「*The Romaunt of the Rose-A* における原典の接続法への対応について」，中尾ロシオ「助動詞 DO の発達について——エリザベス一世の書簡集に見る助動詞 DO の特徴」；〈*POETICA 89 & 90*〉 Toshiyuki Takamiya, “In Memoriam Eric G. Stanley (1923–2018)”, Ed Potten and Toshiyuki Takamiya, “Introduction”, David Pearson, “Provenance Revisited”, Emily Ulrich, “Reconceptualizing the Nuneaton Codex: Cambridge FitzWilliam Museum, McClean 123”, Martha W. Driver, “The Curious Case of a de Worde Edition in the Morgan Library & Museum”, Richard A. Linenthal, “The Last Abbots’ Books: Tewkesbury and Hailes”, Ed Potten, “A Mendicant Pharmacopeia?: Robert Edward Hart’s Copy of the 1485 *Gart der Gesundheit*”, H. R. Woudhuysen, “Some Early Collectors and Owners of Samuel Johnson’s Books and Manuscripts”, Christopher Edwards, “Samuel Johnson’s *Rasselas*: Two Presentation Copies”, Kathryn James, “Provenance as Poetic Faith: John Payne Collier and Accounts of Literary Discovery”, Robert Harding, “‘Scraps of Insignificant Scribbling’: The Rev. Dr. Thomas Raffles and a Lost Book from the Library of Lady Anne Clifford, Countess of Pembroke”, Koichi Yukishima, “The Mansbridge Copy of the Cambridge Edition of Baskerville’s Bible”, A. S. G. Edwards, “On the Cusp of Change: The 1969 Bibliographical Society Gold Medal Award”; 〈*JELS 34*〉 林智昭「前置詞随伴に基づく前置詞らしさの規定：文法化の漸進性に関する共時的研究」，田中祐太「動詞 end up の歴史変化と PredP の出現」，Bai Chigchi, “More on the Emergence of Prenominal Unaccusative Past Participles in the History of English”, Akiko Nagano, “How Do Relational Adjectives Change into Qualitative Adjectives?”; 〈*近代英語研究* No. 34〉 Yoko Yonekura, “Accounting for Lexical Variation in the Acceptance of the Recipient Passive in Late Modern English: A Semantic-Cognitive Approach”, Eri Shigematsu, “The Language of Experience: Representations of Perception in the Novel」，山崎聡「挿入詞 shall I/we say の変化」；〈*英語コーパス研究* 25〉 Naoki Kiyama, “How Have Political Interests of U.S. Presidents Changed?: A Diachronic Investigation of the State of the Union Addresses through Topic Modeling”.

(東京大学教授)